

第三節 艇隊、驅逐隊、掃海隊、潜水隊

第一項 三十七八年戰役前時代

前述第一水雷船ノ出現以來水雷艇數漸次増加セシガ明治二十二年水雷隊條例ノ制定ニヨリ之等水雷艇ハ水雷隊ニ屬セシモ未ダ艇隊等ノ編制ヲ見ルニ至ラズ二十三年八月水雷隊配備公布ノ勅令ニ於テモ水雷艇個々ヲ配屬セラレアリ然レドモ二十二年水雷隊設置後間モ無ク横須賀方面ニ於テハ敷設水雷作業ヲ管掌監督スル横須賀水雷隊司令兼技術會議員(少佐伊藤常作)及水雷艇群ノ監督給與等ニ任ズル愛宕艦長兼横須賀水雷隊司令(少佐澤良煥)ノ兩者竝立セラレシガ而カモ後者ハ概ネ水雷艇群ニ對シテハ後日ノ水雷母艦々長權限ヲ行フニ止マリ水雷艇ニ搭乘シ其ノ進退行藏ヲ指揮スルニアラズ前記水雷隊配備公布後ハ愛宕艦長兼横須賀水雷隊攻撃部司令ト改稱セラレシモ(他ハ横須賀水雷隊敷設部司令トナル)其ノ職掌ハ依然タリ即チ明治二十五年海軍大演習ニ於テ防禦軍ノ編制中水雷隊ノ部ニ敷設部ト攻撃部ト對立セラレアルモ攻撃部ニ於ケル水雷艇ニハ艇長中ノ先任官ヲ以テ攻撃部司令ヲ臨時任命セラレアリテ未ダ後日ノ艇隊司令ニ準ズルモノナク集團出勤時等ハ先任艇長之ヲ指揮スルヲ例トセリ而シテ攻撃部司令ガ概ネ後日ノ艇隊司令ノ職掌ヲ探ルニ至リシハ二十五年後半水雷隊攻撃部ヲ陸上(水雷隊敷設部廳舎ノ一部)ニ移セシ以後ニ始マル(以上海軍少將石田一郎談ニ據ルトコロ多シ)

右ノ如ク當時ニ於テハ尙正式ニ艇隊(水雷艇隊)ナル編制ヲ見ザリシガ水雷艇數漸ク増加スルニ從ヒ教育訓練上ヨリ將タ戰備上ヨリ水雷艇群單位ノ編制ヲ必要トスル氣運醸生シ二十七年六月發布ノ水雷艇隊運動教範ニ於テ始メテ正文上水雷艇隊ナル呼稱ヲ見ルニ至レリ該教範中ノ定語ヲ見ルニ

水雷艇隊トハ水雷艇二隻以上ヨリ編成スルモノヲ謂フ

トアリ又對艇ニ關シテハ左記ヲ見ル

對艇トハ艇隊中各二艇ノ夥伴ニシテ終始同一ノ運動ヲ行ヒ事ニ臨ミ緩急相援クルモノヲ謂フ

次デ明治二十七年七月海軍々令部長ハ海軍大臣ニ商議スルニ水雷隊ノ内容變改特ニ水雷隊ノ下ニ艇隊及敷設隊ヲ對立設定シ各其ノ任務所掌ヲ明確ナラシメムコトヲ以テセルハ別ニ第二編第四章第二節ニ說ク所ノ如クナルガ戰役ノ爲之ガ解決遲延シ二十九年一月ヲ以テ水雷團條例ノ發布ヲ見茲ニ始メテ法文上ノ艇隊ヲ認メ得ルニ至レリ但シ之ガ實現ハ次記ノ如ク二十七、八年戰役開始ト共ニ始マル

一個水雷艇隊ノ隻數ハ幾何隻トスベキヤニ就テハ當初ヨリ確タル成案無カリシガ如ク水雷艇隊運動教範ニ於テハ「艇隊運動ハ六艇ヲ用フルヲ常規トス」トアリ從ツテ同教範中ニハ一隊六隻ヲ理想トスルモノノ如シ而シテ二十七、八年戰役中山東役ニ於ケル編制隻數ヲ見ルニ概ネ六隻編制ニ依レリ左ノ如シ

第一艇隊 六隻(第二十三、十三、七、十一、十二、小鷹)

第二艇隊 六隻(第二十一、十四、八、九、十八、十九)

第三艇隊 四隻(第二十一、五、六、十)

(備考) 第三艇隊ノ四隻ハ艇ノ不足ニ因ル

三十一年五月改定ノ部團水雷艇隊編制表ヲ見ルニ六隻乃至八隻ニシテ而カモ水雷艇驅逐艇(驅逐艇ノ前稱)ヲモ水雷隊ト同一水雷艇隊ニ編入セルヲ見ル一例トシテ横須賀水雷團第一水雷艇隊ノ編制ヲ左記ス

横須賀水雷團第一水雷艇隊

小鷹、第一號、第三號、第五號、第十四號、第十八號、雷 計七隻

唯注意スベキハ當時ニ於ケル我海軍水雷艇隊ハ左記五個艇隊ニ止マリシヲ以テ兵術上ヨリモ寧ロ戰務上ノ便宜主義ニヨリ適宜編制セラレタルヤノ觀アルコト之ナリ

竹敷要港部水雷艇隊、横須賀水雷團第一、第二水雷艇隊

吳水雷團水雷艇隊、佐世保水雷團水雷艇隊

然ルニ三十三年六月從來ノ水雷艇驅逐艇ハ驅逐艦トナリ軍艦ノ類別中ニ入りシ結果驅逐艦ハ水雷艇隊ヨリ除カルルニ至リ超ヘテ三十六年九月ヲ以テ水雷艇隊編制表ノ大改定ヲ見タリ要點左ノ如シ

一、四隻編制ヲ常規ト爲セリ

二、全水雷艇隊ヲ通ジ一連ノ番號ヲ附シ第一水雷艇隊ヨリ第二十一水雷艇隊ニ及ベリ

斯クテ三十七、八年戰役ニ臨ミシガ新改定ノ適長ナルヲ證セリ而シテ三十八年十二月水雷艇隊ナル稱呼ハ艇隊ト改變セリ爾後編制ニ就テハ特種ノ變化無シ

水雷艇隊(艇隊)ノ所屬ハ其ノ任務所掌ノ自ラ防禦の範圍タリシ關係上戰時事變ノ外概ネ水雷隊、水雷團防備隊麾下ニ始終セリト云フベク大正二年五月公布新水雷隊條例ニ依リ其ノ一部ノ新水雷隊編入ヲ見シモノアリシモ翌大正三年十二月公布艦隊平時編制令ニ依リ全部防備隊ニ復歸ヒリ但シ我ニ大戰役及其ノ他ノ事變、演習等ニ於テハ其ノ一部又ハ大部ハ艦隊ニ附屬セラレ赫々ノ武勳ヲ樹テタルハ吾人ノ記憶ニ新タナル所ナリ

因ニ記ス水雷艇(艇隊)ノ廢止セラレタルハ實ニ大正十二年ニシテ明治十四年第一水雷船(水雷艇第一號)ノ竣工已來年處ヲ閱スルコト實ニ四十二箇年ナリ

(註) 水雷艇、水雷艇隊(艇隊)ハ其ノ性質及任務等ニヨリ後記第四章ト一部分ノ重複セルモノ或ハ彼此參照ヲ要スルモノ多シ

既記ノ如ク先ニ英國ニ註文ノ註文ノ驅逐艦ハ明治三十二年四月ヲ以テ東雲ノ着邦セルヲ第一トシ爾後叢雲、夕霧、電、不知火等相亞ギ着邦シ當初ハ水雷艇ニ準セル處理ノ下ニ水雷隊配備表ニ依リ水雷艇ト同一ノ水雷艇隊ニ配屬セラレシガ三十三年六月始メテ驅逐艦ノ呼稱ヲ與フルト共ニ艦隊編入ノ場合ニ應ゼムガ爲驅逐隊ヲ編制シ驅逐隊司令ヲ置クコトヲ得ルコトトナレリ而シテ之ガ爲艦隊令ノ一部ヲ

改定セラル要旨左ノ如シ

一、二隻以上ノ驅逐艦ヲ艦隊(鎮守府艦隊)ニ編入ズル場合ニ在テハ之ヲ以テ特ニ驅逐隊ヲ編制シ驅逐隊司令ヲ置クコトヲ得

前項ノ驅逐隊ニ隊以上ナルトキハ相互ノ區別ヲナス爲第一、第二等ノ字ヲ冠シテ之ヲ區別ス

二、驅逐隊司令ハ司令長官ノ命ヲ承ケ驅逐隊ヲ指揮シ部下ヲ薰督訓練シ兵備ヲ監理シ隊務ヲ掌理ス

而シテ之ガ理由トシテ記セラルル處左ノ如シ

水雷艇驅逐艦ヲ驅逐艦ト改メラルルトキハ其ノ艦隊ニ編入セラルル場合ニ於テ之ヲ操縦スルニ特種ノ機關ヲ要ス之レ本案ヲ提出スル所以ナリ

然レドモ眞ニ驅逐隊ナル建制部隊ヲ法文上ニ認メシハ三十八年十二月新ニ驅逐隊條例ノ公布ニ始マル(後記)

驅逐隊編制ノ隻數ニ就テハ三十三年後半ヨリ翌三十四年前半ニ亘リ常備艦隊附屬驅逐艦ハ四隻ニシテ之ヲ二隊ニ分チ二隻ヲ以テ一隊トシ各隊ニ司令ヲ置キ指揮セシメシガ寧ロ各種ノ利害ヲ斟酌シ概ネ四隻ヲ以テ一隊トスルヲ可トスル當局側ノ所見ナリシハ左記ニ依リ認メ得ベシ

艦隊附屬驅逐隊ノ編制ニ關シ軍務局意見

常備艦隊附屬驅逐艦ハ現今四隻ニシテ之ヲ二隊ニ分チ各二隻ヲ以テ一隊トシ各隊ニ司令ヲ置キ指揮セシメ居ルト雖驅逐隊戰時ノ編制ハ正隻若クハ六隻トスル豫定ニシテ少クトモ四隻ヲ降ルコト無カルベク故ニ平時ニ於ケル驅逐隊操縦ノ訓練上二隻ノ編隊ヨリモ四隻ノ編隊トナシ一司令ヲ以テ之ヲ指揮セシムルコト其ノ利甚ダナリト信ズ若シ現今ノ一隊ヲ解除シ單ニ二隻編成ノ一驅逐隊ト爲サンニハ經費ノ點ニ於テハ聊カ利スルトコロアリト雖驅逐隊全隊ノ訓練ニ於テハ甚ダ遺憾ノ點ナキ能ハズ

凡ソ海軍ノ勢力ハ人ト物トニ依テ顯ハル物完全ナリト雖人精良ナラザレバ未ダ完備ノ域ニ達セリト謂フベカラズ物完全ナラント欲セバ人ノ訓練充分ナラズ人ノ訓練ヲ充分ナラシメントセバ物ヲ費消ヤザルヲ得ズ要ハ其ノ中庸適度ヲ得ルニアリ現今ノ狀態ニ於テハ四隻編成ノ一隊ヲ組織スルヲ最モ時宜ニ適シタルモノト思フス

右ニ依リ三十四年五月從來二名ノ艦隊驅逐隊司令ヲ一人ニ減ジ驅逐艦四隻ヲ以テ一隊ヲ編制セラレタリ

因ニ記ス三十三年六月任命セラレタル我海軍驅逐隊司令ノ始祖トモ稱スベキ者左ノ如シ

常備艦隊第一驅逐隊司令心得 伊知地 彦次郎

同 第二驅逐隊司令心得 淺井 正次郎

斯クテ驅逐艦ノ既成數ノ増加ト共ニ艦隊附屬數モ漸加シ戰役直前タル三十六年海軍大演習時ニ於テハ左記四個驅逐隊ノ編制ヲ見ルニ至レリ

第一驅逐隊司令 大佐 淺井 正次郎

第二驅逐隊司令 中佐 莊 司 義 基

第三驅逐隊司令 中佐 中山 鋌次郎

第四驅逐隊司令 中佐 笠 間 直

三十七、八年戰役ニ於テハ開戰前ヨリ五個驅逐隊ヲ常備シ戰役中ノ缺損ハ概ネ同期間竣工ノモノヲ以

テ補充セシガ一隊ノ隻數問題ニ就テハ論議ヲ聞クコト比較的少ク寧ロ同戰役中實施セラレタル一隊四隻方針ヲ是認セラレタリシガ爾後驅逐艦々型ノ増大竝ニ對手國驅逐隊ノ編制現狀等ニ鑑ミ漸次四隻編制不可論ヲ聞クニ至リ大正十年頃迄歸着スル所無カリキ

之等ニ就テハ水雷戰隊ニ關スルモノト一併シ別ニ(第四編第八章第一節)述ブル所アルベシ